

甲南女子大学蔵『新古今集美尾津玖志』（福井久蔵新謄写本）について

近藤美奈子

はじめに

『新古今集美尾津玖志』は、本居宣長『美濃の家づと』と石原正明『尾張廼家苞』とを比較した論評に自説を加えた注釈書である。

さて、小島吉雄氏には「新古今和歌集注釈書の話⁽¹⁾」という優れた御論がある。そこで、その御論に依りながら上記の注釈書について簡単に見ておきたい。

『美濃の家づと』は新古今和歌集の当代歌人の和歌を中心とする選釈書で、総歌数六九六首である。『美濃の家づと』から所謂「新注」が始まったとされており、小島氏は「宣長の細緻な訓詁学が応用せられてゐることと、旧来の解釈や鑑賞批評に拘泥せず、自由な批判的態度を以て新古今集の再検討を志してゐることが本書の特長」であり、「従来⁽²⁾の注釈の規範を全然脱却してゐる点に於て画期的な著述」と評価されている。

『尾張廼家苞』について、小島氏は『美濃の家づと』に比肩する画期的著述⁽³⁾であると評価し、その性格について「宣長の説に敬意を表しながらもなほそれに満足出来ず、宣長の説を批判しつつ自説を主張したもので、その説は新古今集への全幅的傾倒から出てゐるものであるから、傾聴に値する所説もあるが、また他面宣長説を駁せむがための駁論と思はれるやうな説

もある。」と評されている。『尾張廼家苞』は、『美濃の家づと』に二二二首を補い、総歌数は九一七首である。

前言に続いて小島氏は、「すなはち両家つとを比較する時は、それぞれに一長一短があつて一概にはその優劣が論ぜられない」ので、「両家苞を比較対照しつつ両者のうちの長を採り短を棄てる」「心用意」が必要とされて「両家苞の比較論評が盛んに行はれる。福井久蔵氏所蔵の『美尾つくし』飯田年平著述の『美濃尾張家苞評』林重義述の『美濃尾張家苞く羅倍』等は、この種のものうちの主要なものである。」と述べられているが、ここで紹介された『美尾つくし』が本稿で取り上げる『新古今集美尾津玖志』なのである。

「翻刻「新古今集美尾津玖志」解説⁽³⁾」によると、福井氏が家蔵する四季部のみの五冊本として『大日本歌書綜覧』で紹介された『美尾つくし』は早くに散逸したものとかわれ、小島氏が実際に見たのは福井氏の手写本で一冊のみであったということである。したがって、小島氏が『美尾つくし』は著者も書写年代も共に不明の写本であるが、美濃・尾張の両家苞を比較してこれに批評を加へたもので、その批評の部分に著者の見識を示してゐる。今残つてゐるのは、その零本である。」と記述された『美尾つくし』は、福井氏の手写本であろうと推察されている。その後、福井氏の手写本は尾崎知光氏の所蔵となり、前

掲の「翻刻『新古今集美尾津玖志』解説」と共に翻刻紹介されたのである。なお、小島氏が披見した福井氏手写本と尾崎氏所蔵本とが同一物であることは、小島氏本人によって確認せられた由である。したがって、当時、尾崎氏所蔵の福井氏手写本が『新古今集美尾津玖志』の唯一知られた伝本であった。その後、新しい伝本の発見を聞かないので、現在も福井氏の手写本が唯一の伝本であることに変わりはないが、その所蔵者は甲南女子大学に変わっている。

ところで、『新古今集美尾津玖志』に関する研究は、前述の小島氏御論と「翻刻『新古今集美尾津玖志』解説」以降ほとんど進んでいないように思われる。そこで、本稿では、甲南女子大学蔵『新古今集美尾津玖志』（以下、『美尾津玖志』と略称する）についての調査を行い気付いた点を報告したい。

一、書誌

既述のように、『美尾津玖志』は、甲南女子大学蔵の福井氏手写本が現在のところ唯一知られている伝本である。同じく尾崎知光氏旧蔵『久世本新古今聞書』と共に紺色布張の帙に納められており、帙の左端には二行書きで「久世本新古今聞書／新古今集美尾津玖志」と書かれた白短冊紙が貼られている。

袋綴（紙縫で下綴じされた形状）一冊。料紙は楮紙。表紙はない。縦二四・三糎、横一六・二糎。全五八丁、墨付五七丁。一面一〇行。第一丁表に内題「新古今集美尾津玖志」とあり、その上方に縦二・七糎、横二・三糎の「福井氏蔵書印」という朱の角印が押されている。

歌数は、「春歌上」のみの五八首。歌は注釈本文よりも二字ほど上から書く。詞書と作者名も載せるが、詞書は注釈本文より二字ほど下げて書く。

本文と書写の状態については、「翻刻『新古今集美尾津玖志』解説」に「その筆蹟は福井久蔵博士のものと言われているが、脱字や衍字と思われるものもあり、またところどころ判読しがたい文字もありそれはこの写本の書体においてすでに難読の文字であったのをそのまま似せて模写されたのではないかと思われるものもある。」と記されている通りの印象である。

二、採歌数・『尾張廼家苞』受容

歌数は、「春歌上」の五八首である。その中には、『美濃の家づと』『尾張廼家苞』（以下、『美濃』『尾張』と略称する）の両方に採られていない歌三首（三四、四三、六四番）が含まれている。『美濃』にないもの六首（一八、四四、五四、七三、九二、九七番）は、『尾張廼家苞』が追加した二二二首中に含まれており、すなわち全て『尾張』にある歌である。また、『尾張』にある歌は全て『美尾津玖志』に採られている。すると、ここで、『美尾津玖志』は『尾張』を基に採歌しているのではないかという疑問が生じてくる。

さて、『美尾津玖志』は、『美濃』を「美説」、『尾張』を「尾説」として両家苞を比較論評したものであるが、注の形式は、冒頭に『美濃』の注文を掲げ、次に「評曰」として両家苞に対する論評や自説を記すというものである。『尾張』の注文は、『美濃』のように掲げられてなく、「評曰」の中で適宜引用さ

れるという具合になっている。

ところで、『尾張』の注釈は、『美濃』の注文を前から順に適宜切り取って引用し、その部分についての論評や自説を割り注の形で加えるという形式を繰り返して行われている。そして、『尾張』が『美濃』を引用する方針は、一番歌注の冒頭に次のように記されている（【】が割り注部分⁴）。

初句はもじいひしらずめでたし。【此上に、めでたしとあり。されど、此集の哥いづれかめでたからざらん。とりわきてほむるは中々なるわざなれば、今みな略くべし。】すなわち、実際には『美濃』⁵冒頭部分には、「めでたし。詞めでたし。初句はもじ、いひしらずめでたし。」と記されているが、傍線部のような褒詞は省くという方針である。また、『尾張』二三番歌注にも「又みのの家苞の文も、させることなきははぶく。事ながきをいとひて也。下これにならふべし。」と、取り上げるに値しない注文は省くという方針が示されている。この方針を念頭に置いて『美尾津玖志』と『美濃』とを比較してみると、『美尾津玖志』の『美濃』引用が『尾張』と同方針であるとの印象を受けた。そこで、『美尾津玖志』と『尾張』について、『美濃』引用箇所を比較してみた。すると、『美尾津玖志』の『美濃』引用部分が『尾張』のそれとびつたり一致することが判明した。

一例として、『美尾津玖志』九四番の注文を掲げたい。これは、単純な削除のある『美濃』冒頭部分ではなく、注文の半ばから数箇所が省かれている複雑な例である。括弧内には、削除されている『美濃』の注文を補う。

二の句、花を見てくらせるにはあらず。尋ねきて、いまだ

見ずして暮ぬるよしなり。（花をたづねての意也。まつとしもなきといへるにて、花は、まて共いまだえみぬ心をあらはせり。）もし既に見たるにしては、尋ねきてといへるも詮なく、四の句のかけ合も力なし。新拾遺集俊成卿の歌にも、山桜咲やらぬまはくれごとにもまたでぞ見ける春の夜の月。（木の間、花のかたへもひゞけり。）下旬、おもひかけざりし月を見て、それもおもしろきことにもあるべけれど、（四の句のさま、）さは聞えず。花をこそ見むと思ふに、待もせぬ月の出たるよと思ひて、月をばめでぬ方に聞えていかゞ。右の俊成卿の歌は、四の句のさま、月をもめづる方に聞えたり。（よく味ふべし。）

この『美尾津玖志』における『美濃』注文は、一、二文字の異同が二箇所にある以外は、『尾張』のそれと全く一致する。つまり、『美尾津玖志』の『美濃』注文は『尾張』からの孫引きである。そして、『尾張』では切れ切れに引用されていたものが一続きにまとめられて冒頭に置かれているのである。

それでは、『美尾津玖志』の『尾張』受容態度についてももう少し見ていきたい。既述のように、『美尾津玖志』は『尾張』注文の全体は掲げていない。必要に応じて引用しているだけである。例えば、四〇番「尾説いひしらずめでたく、申むね更になし。感心々々。」、九八番「是又すべて尾説よろし。申す旨なし。」は、これが「評曰」部分の全文で、『尾張』注文の引用はない。このように「尾説」とあるだけで『尾張』注文の全体が分からない注釈では、『美尾津玖志』の注文のみを見ている読者にはその言わんとするところが十分に伝わるとは思われない。『美尾津玖志』とともに『尾張』をも開いている読者で

なければ、これらの注釈は理解できないであろう。

さて、『美濃』には採られず『尾張』で追加された歌の中に興味深い事例がある。一五番「評曰、この説の如し。：（略）：」、五四番「評曰、此説の如し。」、九二番「評曰、此説の如し。：（略）：」、九七番「評曰、此説の如し。」も前掲の四〇番九八番と同じく、『尾張』注文が全く引用されていないので、『美尾津玖志』のみを見ている状態では「此説の如し」の意味するところは不明である。さらに注目すべきは、『尾張』に対して、通常用いている「尾説」ではなく「此説」と呼んでいることである。「此」は近くにあるものを指す指示語である。したがって、『尾張』を「此説」と呼ぶということは、『尾張』が身近にあるということを示していることになる。実際にということではなくとも、今、眼前に『尾張』が開かれて置いているという状態を表しているのである。このように見ると、『美尾津玖志』は『尾張』を参看しながら読むという前提で書かれていると言えよう。

『美尾津玖志』は、『尾張』からの『美濃』注文の孫引きや自注の読解に『尾張』の参看を前提にするなど、表立たない形で『尾張』を受容していることが確認できた。因みに、『美濃尾張家苞くらべ』も両家苞評だが、その『尾張』受容は単純で露わである。すなわち、『尾張』の全文を引用し、その後「本居先生を甲とし石原氏を乙と」して甲乙の優劣を述べるという形式である。

三、注釈姿勢

『美尾津玖志』には著者名も序文もないので、誰がどのような意図をもって著したのかは明らかではない。しかし、五七番歌「難波がたかすまぬ浪もかすみけりうつるもくもる朧月夜に（源具親）」の注文には著者の考えや立場を窺い知ることのできる内容が記されている。それは、「評曰、美説共に同意にて、いづれもよろし。」の後に続けて、「さて、上に論らひおくべきを、おもふむねありて餘たり。いはんとす。」という前置きで始まる長大な文章である。

ここには、新古今和歌集の卓越した価値を世に知らしめた「本居先生」に対する深い尊敬の念が述べられている。そして、「いとめでたし。詞めでたし。」などの褒詞を連発する『美濃』に対して、新古今和歌集が素晴らしいのは当然なので「みなさし置いて論ぜざるなり。」と言う『尾張』を批判する。だからといって、『美濃』に盲目的に追従しているのではない。「美説のみながらによろしとはあらねど、そはいづれの注いづれの抄にも、たがひに得たる得ざるはのがれがたきしわざにしあれば、よきはよく、あしきはあしく、さだめいふべき」なのに、『美濃』の褒詞の出てくる所以に一切目を向けようとしないで捨て置こうとする『尾張』の態度を批判しているのである。公正な学問的態度ではないというのである。

また、五七番歌の結句「朧月夜に」の「に」についての『尾張』の批判に対しても、それは自分が立てた理論に当てはめて言っているのだと『美尾津玖志』は反論する。引き続き、一般論から『美濃』『尾張』両家苞の批判に及んでいる。少々長いですが、引用したい。

すべていかなる英雄にもおもなわす人の心にて、おの

がたてたるすぢ異なるものなれば、おのがよしとおもふことを人々中々にわろしとさたし、人のわろしといへるをおのれはいひしらずめでたくおもふことあるなん、いはゆる性の近きによる類なめれば、古人の歌文をさたし、あきらめんは、いとかたきわざにして、解得たりとおもふことの、よみぬしの心にはいたくたがへることのみ多かるべければ、よく心を尽して、わたくし心なく見あきらむべきこと、いふも更なり。集中数百人の名匠、またおのく一家の風骨ありてひとしからざれば、おのがたてたるすぢに引合せてとかくいはんは、いとみだりなることぞかし。よくその人々の風骨につきて、その一首の妙をさへるを、歌といふことをしり、そのさまを知れる人とはいふて、本居先生は、緩急照応を説き玉ふことは古今未習理なれども、あまりに上下のかけ合せにかゝづらひなづみ玉ふこと甚しきより、餘韻おくれ曲折微妙不可思議の所に失おはしまし、正明は、姿詞のえんにうるはしうて風調のよろしきを一貫の論とたてたるより、緩急照応の妙にくらく、換骨点化の活用に僂漏なる所にありて、互に両全を得られざるは、これみなみづからのたてたるすぢにかゝはり玉ふ一癖にして、もとづく所は公平ならざるよりおこれるものと見えたり。……略……。

すべて、かやうになめしきことをとかくいひあげつらへるを、みなこの二先生の恩頼徳沢の偏き御蔭にて、さらに然様一己の見解にいでたることならず。ゆめくそしり玉ふことなかれとこそ。

この引用文で最も注目すべきは、傍線部である。歌の批評を

する態度について、精魂を傾けて私情に左右されないうではつきりと見極めねばならない、自分の立てた理論に引き合わせてものを言つてはならない、公平でなければならぬ、という点が強調されている。前述したが、この引用文の前の箇所で、『美濃』の褒詞や結句の「に」に対する『尾張』の言説が批判されていたのもこの立場からであった。すなわち、これが『美尾津玖志』の著者の注釈姿勢だと考えられるのである。ここに記されている『美濃』『尾張』の長所と短所の指摘も公平で的確なものと言え、『美尾津玖志』注釈全体においても、『美濃』『尾張』への批評は、どちらにも与しない公平な態度で行われていると認定できる。

四、注釈の特徴

特徴の一つとして、上述したように『美尾津玖志』には『美濃』『尾張』に採られていない歌が三首(三四、四三、六四番)追加されているということが挙げられる。その意図がどのようなものであるか見ていきたい。

三四番「朝霞ふかく見ゆるや煙たつむろの屋しまのわたりなるらん(藤原清輔)」は、注文冒頭にある「この歌させるふしはなけれど、姿詞ともにめでたく見ゆる歌なるを、美説共にはぶかれたる意をしらず。」という一文に追加の意図が述べられている。傍線部「姿詞ともにめでたく」が当該歌を評価する理由である。「詞めでたし」は『美濃』が度々用いる褒詞であるし、前章で取り上げた五七番歌の注文で「正明は、姿詞のえんにうるはしうて風調のよろしきを一貫の論とたてたる」と指摘

する『尾張』の和歌評価基準とも重なる。つまり、両家苞の評価基準に当てはめれば当該歌は採歌されるべきだとの考えである。しかし、波線部「美説共にはぶかれたる意をしらず。」というように、両家苞の採歌基準には気付いていない。当該歌が採歌されていないのは、実は作者が清輔であったからである。寺島恒世氏「新古今注『尾張廼家苞』について―注釈の基本的態度―」には、もともと『美濃』でも清輔歌は例外的に一首（一八四三番）しか採られていなかったが、その一首も前代歌人の歌として『尾張』によって省かれた旨が詳説されている。『尾張』の採歌基準に照らせば、当該歌は採られるはずがなかったということになる。

四三番「心あらばとはまし物を梅がゝに誰里よりか匂ひ来つらん（源俊頼）」の注文には、「この卿はやゝ当時より年代古きより美説にのせられず。されど、かばかりめでたきをむげに除くことならず。歌ざまも、もはら当時の勢にかなへるをや。：（略）：姿詞共にうるはしくてめでたき歌なり。」とある。作者が前代歌人なので『美濃』にとられなかったことは承知の上で、なおも採歌されるべきだったと主張する理由（傍線部）は両家苞の和歌評価基準と合っていると思われる。

六四番「つくぐと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水（行慶）」の注文末尾には「この歌、上下いとよくとゝのひて、えんにも、いうにも聞ゆる也。春雨のつれづれなるさま、いとあはれにをかしきを、美尾にはのせられず。春雨のふるき姿とやおもはれけん、いと口をし。」とある。当該歌が傍線部の如く『美濃』『尾張』の和歌評価基準を満たしていることを述べ、それにもかかわらず両家苞に採られていない理由

を波線部のように推量しひどく残念がっている。しかし、歌の姿ではなく、作者に問題があった。行慶は前代歌人なので、もともと両家苞に一首も採られていたのである。

このように見てくると、『美尾津玖志』の著者は『美濃』『尾張』の和歌評価基準についてはよく承知していて、それに合致して自分が良いと思う歌を選んだのであろうが、歌人に関する両家苞の採歌基準の認識に欠けていたといえる。また、両家苞に採用されていない歌であるのに、両家苞評という枠を超えて追加しているところからは、両家苞への対抗心や強い自負心が窺えるように思う。

ところで、『美尾津玖志』に存している五八首のうち両家苞比較の対象となっていないものは、『美尾津玖志』による追加分三首、『尾張』による追加分六首、元来『美濃』に歌しか載っていないかった一首を除いた四八首である。但し、七九番は両家苞に注文があるにもかかわらず『美尾津玖志』の注文がないので除くと、両家苞評があるものは四七首となる。

さて、『美尾津玖志』の両家苞評は、「三、注釈姿勢」の引用文からも察せられるように、両家苞の勝負判定を単純に記したというものではない。短い評もあるが、大概は両家苞を詳細に批評し自説を述べるといふものである。その評もどちらか一方に負担するのではなく、ある箇所ではこちらを、別の箇所ではあちらを支持したり逆に否定したりする、また修正や補正をする、飽き足らない場合は自説を開陳するなど複雑である。

両家苞評なので注文冒頭には勝負判定が記されているはずであるが、実は単純な勝負判定にとどまらないものも多い。例えば、「評曰、美説めでたし。但し、初御句かすみたなびくへか

ゝれり、二の御句へつゞけてはこゝろうべからず、といはれたるはいかゞあらん。」(二番)、「評曰、美説に……といはれたるは、よろしくもおぼえず。すべて尾説の方よろし。されど、なほ行春の難をこたく言ひ解くこと能はず。」(五番)、「評曰、二説、五十歩百歩也。たゞし、美にときはも岩根もそめぬ意をたすけたりといはれたるは、めでたし。」(六六番)などである。これらは、傍線部の但し書きや逆接の詞を用いて、「めでたし」や「よろし」などと単純に断定するだけでは伝えきれない内容を補足している。両家苞に真摯に向き合っている姿勢の表れだと言えよう。このような例が十数例、さらには勝負判定の言葉もなくいきなり批評が始まっているものが二〇例ほどある。これらを見ると、『美尾津玖志』にとつては勝敗の判定を下すことそれ自体にはあまり意味がなく、批評こそが重要であったのだと思われる。

次に、『美尾津玖志』が両家苞をどのように評価しているかを、『美尾津玖志』が追加した三首及び『美尾津玖志』の評が欠如している一首を除いた、五四首について分類してみると次の如くである。(美説Ⅱ『美濃』、尾説Ⅱ『尾張』)

〈美説・賛同〉一三、〈美説・否定〉七、〈尾説・賛同〉一五、
〈尾説・否定〉一一、〈両説・賛同〉三、〈両説・否定〉二、
〈両説・一長一短〉二、〈両説への言及なし〉三

前述したように、一つの注文内において同じ家苞が褒められたり批判されたりしている場合があるので、ここに挙げた数量は大体的ものであるが、数量的には両家苞への評価にはそれほど差はみられない。また、『美尾津玖志』に自説の記述が多いということは既に述べたが、逆に自説が全く記されていないも

のを挙げると四首しかない。

次に取りあげる特徴は、初学への教訓的な言辞が目立つということである。煩瑣であるが、用例を挙げる。「然るを初学あるひはこれを……難あるまじきやうにもおもふめりな。かならずもしかにはならず。」(一番)、「……心すべきこと勿論なり。」(一六番)、「歌は餘韻を大切にすることなれば、それを第一として解くべきなり。」(二四番)、「よく／＼一首の上を熟読翫味すべきなり。」(二五番)、「すべて、かうやうのことをとかく論ずるは畢竟無益なることなれど、一わたりは心得おきたらんも又罪なきことなり。」(四五番)、「初学あるひはまどはん事をおもひて、うるさきまで。」(五一番)、「然るを、初学あるひは難評して……ともおもふなるべし。」(六一番)、「かやうの所をよく心得ざれば、春(昔)の歌の趣もみえがたく、みづからのよきはよみがたきわざぞかし。」(六三番)、「近代の人、多くはかゝる所に心をよすることなく、たゞ詞のせんさくのみかゝづらふは、いふかひなきことなり。」(八六番)、「よく本歌と引合せて心得べし。」(九一番)、「輕易にみるべからず。」(九三番)などである。

用例中に「初学」という言葉が度々使われていることから、『美尾津玖志』が対象としている読者が「初学」であることがわかる。その「初学」が歌人であることは、六三番歌注に「みづからのよきはよみがたきわざぞかし」とあることで明らかである。ここに引用した言辞を総合してみると、『美尾津玖志』は、和歌初心者に対して、歌人として心得ておかねばならない知識や教養、心構えなどを教えて、その作歌活動を助けるといふ立場から書かれているように思われる。そして、『美尾津玖

志』の著者がこのような教授をするのに相応しい、かなり和歌に通じた人物であることは、実際、『美濃』『尾張』両家苞に對する鋭く詳細な批評内容からも容認できよう。

ところで、『美尾津玖志』を読んでいて気付いたことがもう一つある。「てにをは」すなわち助詞に對する強い関心である。「は」「も」「の」「に」「が」「ぞ」などについての言及が目立つ。「てにをは」は歌人ならばみな関心を持つてゐるであらうし、『美濃』でも度々言及してゐるものではあるが、『美尾津玖志』の理解と関心は格別に深いように感じられる。次に、少々長文ではあるが、助詞に對する詳細な記述のある一番歌注の全文を掲げ、合わせて『美尾津玖志』注釈の実態の紹介としたい。

春たつ心をよみ侍ける 撰政太政大臣

みよし野はやまもかすみてしら雪のふりにし里に春は来にけり
初句はもじ、いひしらずめでたし。のともやとあらんは、
よのつねなるべし。

評曰、美説、初句はもじ、いひしらずめでたし、のともやともあらんはよのつねなるべしといはれたるを、尾説に畢竟は口調をいたはる為に枉てはとのたまへるなれば、はもじはほめ奉ることもなし、下にいふべきも、じを上にいひて、めでたしと、のへ玉へるなれば、此も、じをこそほめ奉るべくは有けれといへる、互に英傑の明断とおぼへたり。但しいづれも一得一失ありて、美にはもじをのみめで、も、じをいはざることも千慮の一失、尾にも、じをのみいひて、はもじを解し得ざるも明玉の瑕瑾といふべし。いでや、そのよしくは

しく弁へんとするに、美にはもじをしもとりわきてほめられたるは、かいなで人ならんには、かならずやとかのとかいふべき所なるを、この公の古風おわはす^{（弁）}るより、かくはとおかれたるがいひしらずめでたきからにはいはれたれど、そのはとあるがめでたき意をばくはしくいひおかれざるより、正明の語路の宛転に不足ぬ所あるより心をえられたるもの也といふやうの説さへいできにたり。おのれはた美説のめでたしとある意はしらねど、そはおのれがめでたしとおもふことをいふべし。そも、いにしへならの京におはしまし、ほどは、大和国にては吉野山のいと高く奥深きより、高きことをいひ奥深き所をいはんとし思ば、つねに此山をとり出ていふがならはしのやうなりけるより、今の京になりて後も、なほそのかみをならひて、しかよみ来れる也。古今集に、はるがすみたてるやいづこみよしの、よしの、山に雪はふりつ、拾遺集に、はな^{（る）}たつといふばかりにやみよしの、山もかすみてけさは見ゆらんなどあるをはじめ、ある也。立春の心をよめるを、みなその高山とあるよしの山をとり出ていへることしるべし。さるを、この公のその意をよく得玉ひて、いづこはあれ、とるはその高山ときこゆるよしの山をとり出玉ひて又^{（マ）}よしのはと初句にはおき玉へるなり。然るを初学、あるひはこれをみよしのやといひても高山なる趣をしらすに難あるまじきやうにもおもふめりな。必しもしかにはならず。元来、は、物をとり出て分つ意の詞、たゞおいらかにやのとはいひ玉はで、多かる山々の中よりとり分て、みよしのはと、わけの玉へるがいひしらずめでたき也。然らば、みよしの、山はといはではと、いふ人もあらんが、それはた、さる意ならず。

美よしのはと打出たるは、その所をひろくさしていはれたるにて、山はさら也、故郷も、このはもじのうちにあらりたるものなり。かくやうにいふは所の例にて拾集の中にこれかあることなり。人はしらず正明のたゞ語路の宛転になど洩□□□過りたるはいかにぞや。さてはその意は、はるかに山は深山なれど、其中に一番高いよしの山までもかすんで、此中しらゆきのおいてゐた山のいふも更也故郷にてもかすんで春は来らんと也。二句山もの下にまでといふ詞をそへてきくべし。美説はもじの解はいかゞなれど、尾のもゝじの解はげによくもとき得られたり。

この注文を見ると、これだけの長文がほとんど助詞「は」に関して述べられていることに驚く。「は」に関する注文内容を簡単に辿っていききたい。『美濃』は初句の助詞について、「の」や「や」でなく「は」を用いたことを非常に褒める。それに対して『尾張』がかえって二句の「も」の方を褒めるべきだと反論したのを受けて、『美尾津玖志』は両方に賛意を表しながら、『美濃』が「は」を褒めた理由を詳しく述べていないので、かわりに自分の思うところを述べると言う。吉野山が高山というイメージをもって詠まれることを指摘して例歌を示し、作者もその認識をもって吉野山を選んで「みよしのは」と初句に置いたと言う。和歌初心者の読者に対して、初学は「みよしのや」でも高山の趣を表現するのに悪くはないと思うだろうが、そうではないのだと「は」の意味を説く。元来、「は」は物を取り出して区別する意味の詞で、ただあっさり「や」や「の」と言わないで、沢山ある山々の中から吉野山を特別扱いして「み

よしのは」と区別して作者が詠んだことが非常に素晴らしいのだと言う。それでは「みよしのゝやまは」と詠まなくてはいけないのではと言うひともあるだろうが、そのような意味ではない、「みよしのは」と詠み出したのは、その場所を広く指して言ったのであって、山は勿論のこと、故郷も、この「は」の中に（表現されているのだ。）と言う。なお、文が乱れているので括弧内は推測して補った。

ここで説明している「は」の意味用法が非常に興味深い。「は」は、『広辞苑』では「(係助詞) 体言・副詞・形容詞や助詞などを受け、それに関して説明しようとする物事を取りあげて示す。(以下略)」と説明されているが、それと較べてみると『美尾津玖志』の「元来、は、物をとり出て分つ意の詞」という指摘は的確なものだと言える。そして、この「は」の意味を踏まえて行つた「美よしのはと打出たるは、その所をひろくさしていはれたるにて、山はさら也、故郷も、このはもじのうちにあらりたるものなり。」という解釈は優れたものだと思われるが、同様の解釈が『新古典日本文学大系』でも示されている。『美尾津玖志』に掲げられている拾遺和歌集一番の歌「はなたつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみてけさは見ゆらん」は、現代では本歌と認定されているが、『新古典日本文学大系』では、この本歌を踏まえて「この山と里を総括するのが初句で、そのため本歌の「の」を「は」に改める。」と注しているのである。

このように、一番歌の注釈には、『美尾津玖志』の著者の助詞に対する強い関心と深い理解とが表れているのである。

おわりに

以上、『美尾津玖志』について気付いた点を思いつくまま述べてきたが、簡単に振り返ってみたい。

『美尾津玖志』は『美濃』『尾張』を比較論評した所謂両家苞評であるが、同じく両家苞評である『美濃尾張家苞くらべ』とは性格を異にしている。『美濃尾張家苞くらべ』は、掲出した『尾張』の注文の後に両家苞の勝敗を簡単に記したものである。時に詳細な自説を加える場合もあるが、概ね簡略な注である。論評よりも、両家苞を著者がどのように判定したかという点に重きが置かれた注釈書だと言えよう。それに対して、『美尾津玖志』は、勝負の判定を下していない注も多い上に内容も概ね詳細で、比較論評を主体とする注釈書だと言えよう。

さて、『美尾津玖志』について述べて来たところをまとめると、その注釈に向き合う姿勢は両家苞に対して公平で、座右に『尾張』を置いた和歌の初心者を読者に想定して教訓も交えながら、自説も加えて両家苞を論評したものということになる。そして、その注釈内容は両家苞に較べて決して遜色がないと思われる。『美尾津玖志』の著者は不明であるが、歌学に通じ、両家苞の著者を尊崇し、その歌学上の立場や長短をも深く理解している人だと言えよう。

このように見てくると、現在のところ『美尾津玖志』の伝本が僅か一本しか確認されていないのが惜しまれる。「翻刻」「新古今集美尾津玖志」解説」にも指摘されているが、三一番「うぐひすの涙のつらゝ打とけてふるすならずや春をしるらん（惟明親王）」の注文に「本末たがへることにしてあやまりなるよ

し、冬歌にいふべし。」とあるので冬歌の注釈が存在していたことが窺われ、福井氏が家蔵されていたという四季部五冊本の発見が待たれるところである。

注

(1)

『新古今和歌集の研究』（星野書店、一九四四年。／増補 新古今和歌集の研究』、和泉書院、一九九三年）。以下、小島氏の引用はこれに拠る。

(2)

寺島恒世「新古今注『尾張廼家苞』について——注釈の基本的態度——」（『山形大学紀要・人文科学』第14巻3号、二〇〇〇年二月）の「二 注釈の対象」参照。

(3)

この御論で、『尾張廼家苞』は、『美濃』から藤原清輔歌（一八四三番）を省いているので総歌数が九一七首であることを指摘されている。

野崎典子・室田由利子・井上明子「翻刻「新古今集美尾津玖志」」（愛知県立大学『説林』X、一九六三年一月）の解説である。以下、『美尾津玖志』の本文引用はこの翻刻に拠るが、誤植等は原本によつて直し、句読点、濁点、記号などを私に付した。また、歌番号は『新編国歌大観』による。

(4)

『尾張廼家苞』の引用は、『新古今集古注集成 近世新注編2』（寺島恒世、翻刻・解題。笠間書院、二〇一四年）に拠る。傍線は私に付す。

(5)

『美濃の家づと』の引用は、『新古今集古注集成 近世新注編1』（石川泰水、翻刻・解題。笠間書院、二

〇〇四年)に拠る。傍線は私に付す。

(6) 林重義『美濃尾張家苞くらべ』(吉川弘文館、一九〇二年)。

(7) 注(2)掲載論文の「二注釈の対象 b 歌人について」の章参照。

(8) 前に同じ。

(9) 田中裕・赤瀬信吾 校注『新古今和歌集』(『新日本古典文学大系』、岩波書店、一九九二年)。

(10) 田中康二『本居宣長の国文学』(へりかん社、二〇一五年)、「第一部 本居宣長の著作の受容・第三章

『新古今集美濃の家づと』受容史」の「五、「家づと」比較論―林重義『美濃尾張家苞俱羅倍』参照。